様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２９６８

研究課題名（和文）照応表現第二言語習得研究 - 中国語・日本語・英語を中心に -

研究課題名（英文）Second language acquisition research about anaphor:Chinese, Japanese and English

研究代表者
ＺＨＡＩ　ＹＯＮＧ（ZHAI, YONG）

静岡大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：５０５９８４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、第二言語習得でも普遍文法が働いて言語習得が行われると主張する。ただ、習得する知識項目が難しい場合、普遍文法は働かずに一般的な問題解決能力のみが働く。習得する知識項目が易しい場合、普遍文法は起動し、第二言語習得では母語習得と同じメカニズムで、周りからのインプットを分析し、知識項目の特性を身につけていく。普遍文法が作動し、かつ母語と同じ振る舞いしている知識項目を学習する場合、母語の影響で学習者の第二言語習得に促進する。しかし、普遍文法が作動しない場合、母語と同じ振る舞いをしている知識項目かどうか無関係に、学習者が一般的認知能力で第二言語を理解する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　第二言語習得でも普遍文法が働いて言語習得が行われるのか、あるいは、普遍文法は働かずに一般的な問題解決能力のみが働くのか。この問題は、1990年代に盛んに議論された問題であり、現在も論争が続いている。本研究では、第二言語習得において普遍文法が働く場合と働かない場合があると主張する。普遍文法が働く場合、第二言語習得では母語習得と同じメカニズムで言語習得が行われる。普遍文法が働かない場合、第二言語習得では母語の影響も受けず、学習者が一般的認知能力で第二言語を理解する。本研究は今まで議論されてきた問題の解決に貢献できる。また、「照応表現の解釈」についての第二言語習得研究データの提供が可能となる。

研究成果の概要（英文）：　This study suggests that the linguistic behavior of non-native speakers can be accounted for in terms of interlanguage grammars which are constrained by Universal Grammar (UG). However, UG does not always works in L2 acquisition, although UG always works in L1 acquisition. If the items are difficult to study, UG will not be activated and the learner will understand L2 with general cognitive ability. If the study items are easy, UG will be activated in the same way as when learning L1. When UG is activated, the L2 acquisition uses the same mechanism as the acquisition of L1 to analyze input from the surroundings and acquire the characteristics of knowledge items. If UG is working and the grammar of L2 behaves the same as L1, the influence of L1 promotes the learner's acquisition of L2. However, when UG does not work, the learner understands L2 with general cognitive ability, regardless of whether the knowledge item behaves the same as L1.

研究分野：第二言語習得

キーワード：照応表現

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 英語 himself や日本語「自分」・「彼自身」、中国語「自己」・「他自己」などの照応表現がどういう場合に誰を指すかについて多くの研究者が取り組んできた。どの名詞句が先行詞となるかについては、いくつかの規則がある。その規則は、インプットからだけでは習得できないと考えられている。したがって、照応表現の解釈に関わる規則は言語の普遍的基盤となる文法(Universal Grammar: UG)の原理の一部であるとみなされている。母語習得では、幼児は生まれつき備えている規則に基づいて、周りからのインプットを分析し、母語の照応表現の特性を身につけていく。第二言語習得の場合はどうだろうか。母語と第二言語の照応表現の解釈上の制約が同じ場合は、単に母語の知識を第二言語に応用しているかもしれない。しかし、母語と第二言語で異なる場合はどうだろうか。

(2) 中国語と日本語は、母語と類似している文法を持つ第二言語習得する場合と、母語と異なる文法を持つ第二言語習得する場合、どちらの習得が容易なのかを調べることに対し、非常にいいデータを提供できる言語である。

２．研究の目的

中国語と日本語の照応表現（anaphor, たとえば、日本語 :「自分」、中国語 :「自己」）の第二言語習得について比較研究する。主に三つの問題を考察する。

(1) 照応表現において、中国語と日本語は同じ振る舞いをしている。一方、英語は中国語・日本語と異なる振る舞いをしている。中国語・日本語照応表現第二言語習得では、日本語母語話者・中国語母語話者のほうが英語母語話者より簡単に習得できるかどうか？つまり、第二言語習得には母語の影響があるかどうか？

(2) 第二言語習得は母語習得と異なる振る舞いをしているかどうか？

(3) 第二言語習得では普遍文法の原理は働くかどうか？

３．研究の方法

中国語「自己」と日本語「自分」は同じ先行詞指向を示しているが、英語 himself と異なる振る舞いをしている（①、②と③；⑥、⑦と⑧）。一方、中国語「他自己」、日本語「彼自身」は英語 himself と同じ先行詞指向を示している（④、⑤と③；⑨、⑩と⑧）。下記①、④、⑥、⑨のような中国語照応表現先行詞指向理解調査文を作成し、英語母語話者中国語学習者（習得度により 3 グループ）、日本語母語話者中国語学習者（習得度により 3 グループ）、中国語母語話者（コントロールグループ）を対象に中国語照応表現の文理解調査を行った。下記②、⑤、⑦、⑩のような日本語照応表現先行詞指向理解調査文を作成し、英語母語話者日本語学習者（習得度により 3 グループ）、中国語母語話者日本語学習者（習得度により 3 グループ）、日本語母語話者（コントロールグループ）を対象に日本語照応表現の文理解調査を行った。

① 张三$_{i}$ 认为 李四$_{j}$ 相信　自己$_{i/j}$.

② 張三$_{i}$は　李四$_{j}$が　自分$_{i/j}$を　信用していると　思っている。

③ Zhangsan$_{i}$ thinks Lisi$_{j}$ trusts himself$_{*i/j}$.

④ 张三$_{i}$ 认为 李四$_{j}$ 相信　他自己$_{*i/j}$.

⑤ 張三$_{i}$は　李四$_{j}$が　彼自身$_{*i/j}$を　信用していると　思っている。

⑥ 张三$_{i}$ 给了 李四$_{j}$ 一张 自己$_{i/*j}$ 的 照片。

⑦ 張三$_{i}$は　李四$_{j}$に　自分$_{i/*j}$の写真を　あげた。

⑧ Zhangsan$_{i}$ gave Lisi$_{j}$ a photograph of himself$_{i/j}$.

⑨ 张三$_{i}$ 给了 李四$_{j}$ 一张 他自己$_{i/j}$ 的 照片。

⑩ 張三$_{i}$は　李四$_{j}$に　彼自身$_{i/j}$の写真を　あげた。

４．研究成果

(1) 上記①のような遠距離主語「张三」と近距離主語「李四」を両方先行詞とすることができる中国語「自己」の習得結果は表 1 のようになる。

表 1　中国語「自己」（埋め込み文）の習得結果

| | 母語／中 | 初級／日 | 中級／日 | 上級／日 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遠距離主語 | 2.91 | 1.77 | 1.47 | 1.64 | 1.79 | 1.57 | 1.94 |
| | 0.14 | 0.62 | 0.63 | 0.81 | 0.79 | 0.80 | 0.81 |
| | a b c d e f | a | b | c | d | e | f |
| 近距離主語 | 2.08 | 1.93 | 2.18 | 2.09 | 1.95 | 2.11 | 2.13 |
| | 0.53 | 0.60 | 0.51 | 0.66 | 0.79 | 0.65 | 0.82 |

※　項目ごとに、平均値（1 行目：3 は絶対に「自己」の先行詞になれる；0 は絶対に「自己」の先行詞になれない。）標準偏差（2 行目）多重比較の結果（3 行目）を記載。（以下の表が省略）

※　多重比較については同じアルファベットの記載があるところにグループ間の差があることを示す（5%水準）。（以下の表が省略）

遠距離主語の選択において、日本語母語話者中国語初級・中級・上級学習者、英語母語話者中国語初級・中級・上級学習者と中国語母語話者の得点の間に有意な差は観察された。近距離主語の選択において、両グループと中国語母語話者の得点の間に有意な差は観察されなかった。日本語母語話者は英語母語話者より容易に中国語「自己」（埋め込み文）を習得したとは言えない。

(2) 上記②のような遠距離主語「張三」と近距離主語「李四」を両方先行詞とすることができる日本語「自分」の習得結果は表 2 のようになる。

表 2　日本語「自分」（埋め込み文）の習得結果

| | 母語／日 | 初級／中 | 中級／中 | 上級／中 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遠距離主語 | 2.08 | 1.65 | 2.03 | 2.30 | 1.64 | 1.39 | 1.52 |
| | 0.39 | 0.70 | 0.49 | 0.38 | 0.71 | 0.64 | 0.76 |
| | a | b | c | b d e f | d | a c e | f |
| 近距離主語 | 2.10 | 2.06 | 1.71 | 2.04 | 1.81 | 1.97 | 1.78 |
| | 0.28 | 0.50 | 0.50 | 0.49 | 0.67 | 0.54 | 0.77 |

遠距離主語の選択において、中国語母語話者日本語上級学習者と英語母語話者上級学習者の間に有意な差があることが示された。近距離主語の選択において、両グループと日本語母語話者の間に有意な差は観察されなかった。この結果から、中国語母語話者は英語母語話者より容易に日本語「自分」（埋め込み文）を習得したと言える。

(3) 上記④のような近距離主語「李四」を先行詞とする中国語「他自己」の習得結果は表 3 のようになる。

表 3　中国語「他自己」（埋め込み文）の習得結果

| | 母語／中 | 初級／日 | 中級／日 | 上級／日 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遠距離主語 | 1.19 | 1.41 | 1.25 | 1.09 | 1.62 | 1.51 | 1.54 |
| | 0.63 | 0.95 | 0.76 | 1.04 | 0.89 | 0.60 | 0.88 |
| 近距離主語 | 2.60 | 2.09 | 2.02 | 2.13 | 2.15 | 1.97 | 2.25 |
| | 0.41 | 0.84 | 0.82 | 0.93 | 0.76 | 0.67 | 0.80 |
| | a | | | | | a | |

日本語母語話者中国語初級・中級・上級学習者、英語母語話者中国語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。両グループはともに中国語「他自己」（埋め込み文）を習得したと言える。

(4) 上記⑤のような近距離主語「李四」を先行詞とする日本語「彼自身」の習得結果は表 4 のようになる。

表 4　日本語「彼自身」（埋め込み文）の習得結果

| | 母語／日 | 初級／中 | 中級／中 | 上級／中 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遠距離主語 | 1.08 | 1.26 | 1.41 | 1.08 | 1.22 | 1.08 | 1.25 |
| | 0.56 | 0.59 | 0.55 | 0.63 | 0.68 | 0.62 | 0.72 |
| 近距離主語 | 2.48 | 2.26 | 2.21 | 2.50 | 1.88 | 2.34 | 1.95 |
| | 0.40 | 0.48 | 0.40 | 0.29 | 0.79 | 0.41 | 0.75 |

中国語母語話者日本語初級・中級・上級学習者、英語母語話者日本語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。よって、両グループはともに日本語「彼自身」（埋め込み文）を習得したと言える。

(5) 上記⑥のような主語「张三」を先行詞とする中国語「自己」の習得結果は表 5 のようになる。

表 5　中国語「自己」（二重目的語文）の習得結果

| | 母語／中 | 初級／日 | 中級／日 | 上級／日 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 主語 | 2.96 | 2.80 | 2.60 | 2.73 | 2.42 | 2.41 | 2.65 |
| | 0.09 | 0.34 | 0.42 | 0.35 | 0.58 | 0.53 | 0.43 |
| | a b | c | | | a c | b | |
| 目的語 | 0.68 | 0.49 | 0.78 | 0.77 | 1.49 | 1.30 | 1.19 |
| | 0.50 | 0.47 | 0.44 | 0.60 | 0.82 | 0.70 | 0.73 |
| | a b | c d e | f | g | a c f g | b d | e |

日本語母語話者中国語初級・中級・上級学習者と中国語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。英語母語話者中国語初級・中級学習者と中国語母語話者の得点の間に有意な差が観察されたが、英語母語話者上級学習者と中国語母語話者の間に有意な差は確認されなかった。よって、中国語「自己」（二重目的語文）の学習において、日本語母語話者のほうが英語母語話者より容易に習得したと示唆された。

(6) 上記⑦のような主語「張三」を先行詞とする日本語「自分」の習得結果は表 6 のようになる。

表 6　日本語「自分」（二重目的語文）の習得結果

| | 母語／日 | 初級／中 | 中級／中 | 上級／中 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 主語 | 2.83 | 2.83 | 2.59 | 2.84 | 2.56 | 2.66 | 2.78 |
| | 0.32 | 0.30 | 0.42 | 0.28 | 0.44 | 0.41 | 0.46 |
| 目的語 | 0.52 | 0.46 | 0.75 | 0.53 | 0.75 | 0.73 | 0.65 |
| | 0.57 | 0.48 | 0.56 | 0.52 | 0.83 | 0.78 | 0.99 |

中国語母語話者日本語初級・中級・上級学習者、英語母語話者日本語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。よって、両グループはともに容易に日本語「自分」（二重目的語文）を習得したと言える。

(7) 上記⑨のような主語「张三」と目的語「李四」を両方先行詞とすることができる中国語「他自己」の習得結果は表 7 のようになる。

表 7　中国語「他自己」（二重目的語文）の習得結果

| | 母語／中 | 初級／日 | 中級／日 | 上級／日 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 主語 | 2.77 | 2.52 | 2.28 | 2.58 | 2.21 | 2.51 | 2.19 |
| | 0.31 | 0.58 | 0.54 | 0.72 | 0.64 | 0.42 | 0.78 |
| | a | | | | a | | |
| 目的語 | 2.14 | 0.94 | 1.25 | 0.89 | 1.89 | 1.30 | 1.66 |
| | 0.57 | 0.72 | 0.60 | 0.86 | 0.81 | 0.71 | 0.70 |
| | a b c d | a e f | b | c g h | e g | d | f h |

主語の選択において、英語母語話者初級中国語学習者のほうが中国語母語話者より得点が有意に低かったことが分かった。目的語の選択において、日本語母語話者中国語初級・中級・上級学習者と中国語母語話者の得点の間に有意な差があり、日本語母語話者が日本語の影響を受けずに中国語「他自己」（二重目的語文）の習得が困難であることが示された。英語母語話者中国語上級者の得点が日本語母語話者中国語上級者より高く、中国語母語話者との間に有意な差はないということから、英語母語話者のほうが日本語母語話者より容易に中国語「他自己」（二重目的語文）を習得したと言える。

(8) 上記⑩のような主語「張三」と目的語「李四」を両方先行詞とすることができる日本語「彼自身」の習得結果は表 8 のようになる。

表 8　日本語「彼自身」（二重目的語文）の習得結果

| | 母語／日 | 初級／中 | 中級／中 | 上級／中 | 初級／英 | 中級／英 | 上級／英 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 主語 | 2.23 | 2.21 | 2.09 | 2.16 | 1.86 | 1.84 | 2.37 |
| | 0.50 | 0.55 | 0.53 | 0.85 | 0.82 | 0.80 | 0.70 |
| 目的語 | 1.85 | 1.44 | 1.78 | 1.93 | 1.36 | 1.56 | 1.07 |
| | 0.58 | 0.71 | 0.49 | 0.93 | 1.03 | 0.67 | 0.95 |

中国語母語話者日本語初級・中級・上級学習者、英語母語話者日本語初級・中級・上級学習者と日本語母語話者の得点の間に統計的に有意な差はないことが示された。よって、両グループはともに容易に日本語「彼自身」（二重目的語文）を習得したと言える。

(9) 総まとめ

①英語母語話者は母語英語の影響を受け、照応表現 himself と同じ振る舞いをしている中国語「他自己」、日本語「彼自身」の習得が容易であった（表 3、表 4、表 7、表 8）。一方、照応表現 himself と異なる振る舞いをしている中国語「自己」の習得において困難だったが（表 1、表 5）、日本語「自分」の習得がそこまで難しくなかった（表 2、表 6）。そして、中国語「自己」と日本語「自分」において、埋め込み文のほうが二重目的語文より習得が困難だった（表 1＞表 5、表 2＞表 6）。

②表 2 により、もし中国語母語話者日本語学習者が母語中国語の転移により日本語照応表現の先行詞を判断しているのならば、初級学習者でも日本語母語話者と同じ先行詞指向になるはずである。しかし、初級学習者の先行詞指向は日本語母語話者と異なることから、母語中国語の影響はないと言える。中国語母語話者日本語学習者の場合、学習レベルが上がるにつれ、日本語照応表現を習得し、最終的に日本人と同じようになるということが分かった。中国語母語話者日本語学習者は母語習得と同じメカニズムが働いて、普遍文法が適用していると考えられる。
③日本語母語話者中国語学習者は中国語「自己」と「他自己」の習得が困難であったことが分かった。照応表現の理解を左右するものとして、知覚の方略（例えば、もっとも近いフィラーの方略）、主題役割優先方略など母語以外の要因が大きい。
④中国語「自己」は日本語「自分」より使い方が複雑で、かつ中国語「自己」と共起する動詞は日本語「自分」より範囲が広い。日本語母語話者は似たようで実は母語より複雑な語彙を学習する際、普遍文法が作動せず、一般的認知方略に依存するようになる。
⑤第二言語習得では普遍文法の原理は働いている。ただ、母語習得では普遍文法が常に働いていることに対し、第二言語習得では普遍文法が働いていないときもある（表 1、表 3 日本語母語話者、表 5 日本語母語話者、表 7 日本語母語話者）。習得する語彙あるいは文法が難しい場合、母語と同じ振る舞いをしているかどうかが無関係に、普遍文法は起動せず、学習者が一般的認知能力で第二言語を理解する（③）。習得する語彙あるいは文法が易しい場合、母語と同じ振る舞いをしているかどうかが無関係に、普遍文法は母語習得と同じく起動する（表 2、表 3 英語母語話者、表 4、表 5 英語母語話者、表 6、表 7 英語母語話者、表 8）。母語と同じ振る舞いをしている場合、相対的に習得し易い（表 2）。
⑥研究の目的(1)について、普遍文法が作動し、かつ母語と同じ振る舞いしている場合、母語の影響で学習者の第二言語習得に促進する。しかし、普遍文法が作動しない場合、母語の影響は観察されなかった。
⑦研究の目的(2)と(3)について、第二言語習得では習得する知識項目の難易度により起動する場合と起動しない場合がある。普遍文法が起動する場合、第二言語習得では母語習得と同じメカニズムで、周りからのインプットを分析し、知識項目の特性を身につけていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>ZHAI YONG | ４．巻<br>10 |
| ２．論文標題<br>漢語“自己”和日語「自分」的語彙指向対比分析 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>漢日語言対比研究論叢 | ６．最初と最後の頁<br>69-82 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>ZHAI YONG | ４．巻<br>2 |
| ２．論文標題<br>漢語“自己”和日語「自分」的比較 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>2019年度第二言語習得中日対照研究「学習型」国際シンポジウム論文集 | ６．最初と最後の頁<br>30-36 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>ZHAI YONG | ４．巻<br>16 |
| ２．論文標題<br>中国語“自己（ziji）”と日本語「自分」の第二言語習得比較研究 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>静岡大学教育研究 | ６．最初と最後の頁<br>53-67 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>ZHAI　Yong | ４．巻<br>15 |
| ２．論文標題<br>中国語zijiと日本語「自分」の阻止効果 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>静岡大学教育研究 | ６．最初と最後の頁<br>61-73 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>ZHAI Yong | 4．巻<br>2 |
| 2．論文標題<br>漢語反身代詞的第二語言習得考察 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>静言論叢 | 6．最初と最後の頁<br>123-142 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>ZHAI Yong | 4．巻<br>14 |
| 2．論文標題<br>中国語を母語とする中学生における中国語空主語文処理 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>静岡大学教育研究 | 6．最初と最後の頁<br>31-41 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>ZHAI Yong・備瀬優 | 4．巻<br>14 |
| 2．論文標題<br>中国語否定呼応に関する心理言語学的考察－否定呼応副詞構文の検討－ | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>静岡大学教育研究 | 6．最初と最後の頁<br>83-93 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　8件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>ZHAI YONG |
| 2．発表標題<br>漢語長距離反身代詞的阻断效応 |
| 3．学会等名<br>The 27th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics（国際学会） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI YONG |
| ２．発表標題<br>漢語“自己”和“他自己”的第二言語習得－以母語英語和母語日語漢語学習者為対象 |
| ３．学会等名<br>Acquisition of Chinese: Bilingualism and Multilingualism（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI YONG |
| ２．発表標題<br>漢語“自己”和日語「自分」的比較 |
| ３．学会等名<br>2019年度第二言語習得中日対照研究「学習型」国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI YONG |
| ２．発表標題<br>中日反身代詞的習得対比分析 |
| ３．学会等名<br>第十一回中日対照言語学シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI　Yong |
| ２．発表標題<br>漢語"自己"和日語「自分」的語義指向対比分析 |
| ３．学会等名<br>第十回中日対照言語学シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI Yong |
| ２．発表標題<br>漢語反身代詞第二語言習得研究‐母語英語和母語日語的比較 |
| ３．学会等名<br>第八届中国第二語言習得研究国際研討会（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI Yong |
| ２．発表標題<br>日本語「自分」の阻止効果－中国語zijiとの比較－ |
| ３．学会等名<br>第十二回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>ZHAI　Yong |
| ２．発表標題<br>英語母語話者日本語学習者の日本語空主語文処理 |
| ３．学会等名<br>2017年度輔仁大学日本語文学科・台湾日本語文学会国際シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|